



在来産業の近代化と都市形成の対応に関する日中比較研究

著者	藤川 昌樹
発行年	2018
URL	http://hdl.handle.net/2241/00158901

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

科学研究費助成事業 研究成果報告書



平成 30 年 6 月 19 日現在

機関番号：12102

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K14094

研究課題名(和文) 在来産業の近代化と都市形成の対応に関する日中比較研究

研究課題名(英文) Comparative Study on the relation between modernization of traditional industries and town formations

研究代表者

藤川 昌樹 (FUJIKAWA, Masaki)

筑波大学・システム情報系・教授

研究者番号：90228974

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000 円

研究成果の概要(和文)：本研究では、在来産業のうち酒造業を取り上げ、その近代化が都市形成に与えた影響を日中で比較した。近世には都市の中心部で、住・工・商一体の複合的施設を拠点として小規模に成立した。複数事業者が経営を行った場合でも、近代化の過程で統合され、住・工・商が空間的に分離され、大規模化したことは日中で共通していた。

日本の酒造業の大規模化には限界があったが、1990年代以降の中国では巨大化し、都市内に酒造関係の小都市を成立させた宜賓や、都市全体を酒造業が占拠した茅台のような事例も確認された。一方で、良質な原料の確保に加え、ブランド価値の維持が重要だったため、創業地に本拠を置き続けるという点は共通していた。

研究成果の概要(英文)：This research examined the modernization process of brewing industry and town formation in Japan and China comparatively. In premodern periods, several companies brewed in a town and the scale of house with factory and shop was relatively small. But in modern times the companies were united into one and the house, factory and shop were separated and became bigger than before. Though in Japan the brewing industry did not become so big and therefore the change of towns were limited in quality and quantity, in China after 1990's the industry became enormous. But it was in common that the companies based their headquarters in the places of starting business.

研究分野：建築史・意匠

キーワード：醸造業 前店後場 茅台 紹興 宜賓 窖 創業地 ブランド価値

1. 研究開始当初の背景

1990年代以降、国内の近世・近代都市史、近代都市計画史は著しく進展した。しかし、各分野はそれぞれ固有の価値観にもとづく研究対象と視点を有していたため、互いに密接な関わりを持たずに研究を蓄積しつつある。日本近世の城下町研究に即していえば、武家地・町人地・寺社地といった都市の組成を丹念に解明する研究こそ90年代以降に進展したが、近代化への移行については、陣内秀信(1985)や佐藤滋(1995)らの研究以降は、江戸・東京を対象とした松山(2014)のような若干の例外はあるものの、基本的には大きな進展がみられない。

本研究は醸造業のような、基盤とする旧市街地・旧村落と密接な関わりを持ちつつ近代化し、現代でも一定の規模と活力をもちつつ存続している在来産業に注目することで、近世から近・現代を連続的に捉え、近世・近代都市史、都市計画史を統合する視点・方法を確立することを目指した。

応募者はこれまで、近世の武家地に関わる研究(2002、2013[作事記録研究会])、近世に成立した町並みの調査(吉良川1996・真壁2006・北京2008[北京四合院研究会]など)に従事する一方、大学院生に近代都市史・都市計画史の研究指導を行ってきた。しかし、おのおのの研究で採用した研究の枠組みや方法は微妙に異なり、統一的な視点・方法の必要性を痛感してきた。一方、歴史的町並みの中には酒蔵・醤油蔵などの醸造業遺構が存続していることが多く、その規模の大きさから現在でもまちづくりの重要な資源として期待されているにも関わらず、都市史・建築史研究による価値づけが不十分であるとも感じていた。

指導した大学院生との研究には、野田(醤油、中野茂夫2002)、中国・瀘州及び宜賓(蒸留酒、曾天然2013・2014)など醸造業に着目した近代都市計画史研究の成果もあり、特に院生と共に調査で訪れた瀘州・宜賓の状況が野田と多くの共通点を有していることに驚かされた。しかし、それぞれは個別研究に留まっており、醸造業ひいては在来産業全体と近世の都市・村落の近代化を総体として説明可能であるような、より包括的な理論が構築可能と考え、本研究計画を立案した。

2. 研究の目的

本研究は、在来産業の近代化が都市形成に与えた影響に関する仮説、すなわち、在来産業は

A: 近世には都市・村落双方の中心部において、住・工・商一体の複合的施設を拠点として、周辺村落から原材料の供給を受けながら小規模に成立し、複数の事業者が経営を行う場合もあった。

B: 近代化の過程で複数事業者の経営を統合、事業者も深く関与する基盤整備により住・工・商の空間的分離を達成すると共に、旧

市街地・村落の郊外に中心を移動、空間的にも大規模化し、

C: 最終的には旧市街地・旧集落を含み込む大規模な近代都市を成立せしめ、他地域への拠点の分散化を始めるが、その本拠を移動させることは少なく、創業の地に存続し続ける傾向がある。

との仮説を立てて、日本・中国の在来産業、とりわけ醸造業に着目して比較検討したものである。

3. 研究の方法

日中それぞれで数都市の空間・史料調査にもとづく詳細ケーススタディを実施することで、在来産業の近代化が都市に与えた影響を検討した。

ここでいう空間調査とは、近世段階の都市域の確定と空間構造の把握、空間の近代化のプロセス(特にインフラ・工場・住宅の立地)の把握、歴史的醸造遺構の残存状況の把握と一部の実測調査を、また史料調査は、近世から近・現代にかけての都市を描いた絵図・地図及び文献史料と企業活動の経緯に関する文献史料の閲覧・撮影を意味している。

以上について、両国の概況を把握したうえで、比較を行った。

4. 研究成果

平成27年度には、研究協力者の参加を得て、2015年5月から6月にかけての10日間にわたり、主として中国浙江省紹興市、貴州省仁懷市茅台鎮にて、現状の都市空間の調査を行うと共に、2都市の博物館等で史資料の収集を実施した。中国の在来産業でも「前店後場」と呼ばれる、住・商・工機能が一体化した複合的建築形式が成立していたことが知られているが、上記の都市ではこれらが分解しつつ近代化が図られている様子が明らかになった。

また、茅台鎮では都市規模に対して酒造業の規模が極めて大きく、都市全体にオフィス・各種工場・倉庫等が展開して占拠するような様相を示していることが分かった。これに対し紹興では、酒造業の規模が小さく、工場が郊外に移動して行ったこと、それでも本社や博物館は旧市街地の創業の地に残り続けることが判明した。

国内では、伏見・灘の空間・史料調査を行うとともに、この年度から醤油・酒の醸造業が近世・近代に発達した茨城県石岡市の町並み調査を実施することになったため、同市も研究対象に加えることとした。研究成果としては、四川省・宜賓市についての口頭発表を行った。

平成28年度には、長崎県長崎市、兵庫県篠山市篠山・福住、同県豊岡市豊岡・城崎、青森県八戸市、北海道函館市、山口県柳井市・岩国市における現地調査を実施するとともに、関連する資料の収集を行った。

研究成果としては、福岡大学で茨城県石岡市の町並みに関する成果を口頭発表したほか、

中国四川省宜賓市を対象として取り上げた論文が日本建築学会の論文集に掲載された。

平成29年度には、広島県竹原市・香川県小豆島町（馬木）、岡山県真庭市（勝山町）、石川県小松市・金沢市、富山県高岡市、における現地調査を実施するとともに、関連する資料の収集を行った。

研究成果としては、広島工業大学で開催された日本建築学会大会で茨城県石岡市・桜川市（真壁町）・結城市の町並みに関する成果を、中国天津で開催された東アジア建築史国際会議で山西省五台山の山内集落に関する成果をそれぞれ口頭発表した。

3ヶ年度の研究の結果、日中両国の共通点と相違点が一定程度解明された。両国ではともに近世（日本の江戸時代及び中国の明清期）に酒造業が都市内部で盛んになり、その後近代化に伴う醸造・販売施設の大規模化を経験した。仮説で示したA・Bの展開は両国で一定程度共通していたことになる。しかし、日本では醸造業のうち酒造業については大規模化があまり進展せず、これを中核とした都市の発達は限定的であった。醤油醸造（野田・銚子）の場合は、これに比べると大規模化は著しかったが、それでも中国に比べるとその規模は限定的である。

中国では、1980年代から改革開放政策が実施され、90年代の株式公開を経て、産業として巨大化した。醸造施設自体も大規模したが、中国の贈答の習慣と結びついていたので、特に瓶詰めや包装の工程が重視され、関連工場が大規模化した。そして、宜賓のようにこれらの施設群に加えて社宅なども取り込む形で都市内に工業都市を独立させるような存在になったもの、さらに進んで茅台のように都市全体を占拠するようなものまでが生まれた。拠点の分散化が進展するのではないかとした仮説Cの一部は棄却された。

しかし、日中いずれも創業地を離れないという点では共通しており、これは生産に必要な良質な原料（穀物・水）を得やすいという理由以外にも商品のブランド価値を維持するという側面が強く作用したものと考えられる。日本の場合では、工場が都市を離れた場合ですらも創業家の住宅や本社を創業地に残した半田（酢醸造）の例が象徴的だが、創業家を顕彰できない中国の場合でも、古くからの「窖」（原酒を生産するための発酵用の穴）は現在も大切に保存・活用されている。

ただし、本研究は限られた事例の検討に終始せざるを得なかった。今後も引き続き研究を続けていきたい。

なお、本研究の中国都市についての中心的な協力者であった曾天然氏が、この研究をベースに博士論文「中国白酒醸造業の近代化と都市形成の関係：瀘州、宜賓、茅台を主な事例として」を書き上げ、博士（工学）学位を2015年度に取得したことも副次的な成果として記しておきたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

曾天然・藤川昌樹「中国四川省瀘州市における白酒醸造業の近代化と都市形成の関係」、『日本建築学会計画系論文集』712、pp.1295-1305、2015年6月（査読有）

藤川昌樹「歴史の中の暫定利用：日本の伝統的都市の事例から」、『都市計画』321、pp.20-23、2016年7月（査読無）

曾天然・藤川昌樹「中国四川省宜賓市における白酒醸造業の近代化と都市形成の関係」、『日本建築学会計画系論文集』732、pp.411～421、2017年2月（査読有）

〔学会発表〕（計13件）

曾天然・藤川昌樹「中国四川省宜賓市の現代の白酒醸造業の立地と市街地の関係」、『日本建築学会大会学術講演梗概集』、都市計画、pp.783-784、2015年9月

藤川昌樹「文化財建造物保存の近年の展開：茨城県での調査事例から」（茨城県文化財保護協会研修会、笠間稲荷神社稲光閣、2016年5月30日）

平井恵理・藤川昌樹「石岡市の町並み景観の特徴と看板建築：石岡市における看板建築に関する基礎的研究 その1」、『日本建築学会大会学術講演梗概集』建築史・意匠、pp.325-326、2016年8月

今井文子・藤川昌樹「石岡市の看板建築における店舗空間の拡大とその影響：石岡市における看板建築に関する基礎的研究 その2」、『日本建築学会大会学術講演梗概集』建築史・意匠、pp.327-328、2016年8月

余思奇・藤川昌樹「清代『五臺山聖境全圖』に描かれた五台、台湾及び周辺地区の状況」、『日本建築学会大会学術講演梗概集』都市計画、pp.177-178、2016年8月

余思奇・藤川昌樹「『西巡盛典』から見る嘉慶16年の五台山」、『日本建築学会大会学術講演梗概集』建築史・意匠、pp.869-870、2017年8月

徐暢・藤川昌樹「石岡市旧市街地における歴史的建造物の残存状況：石岡市における看板建築に関する基礎的研究 その3」、『日本建築学会大会学術講演梗概集』建築史・意匠、pp.59-60、2017年8月

大井菜摘・藤川昌樹「旧和泉屋戸田邸の建築的特徴：石岡市における看板建築に関する基礎的研究 その4」、『日本建築学会大会学術講演梗概集』建築史・意匠、pp.61-62、2017年8月

秋葉正美・藤川昌樹「明治35年の真壁町の住居における屋根葺材と平面の関係（その2）～「家屋台帳」による検討～」、『日

本建築学会大会学術講演梗概集』建築史・意匠、pp.331-332、2017年8月
今井文子・藤川昌樹「養蚕と結城紬の生産が鬼怒川流域の民家建築に与えた影響 結城紬生産地域における民家建築の特徴 その1」『日本建築学会大会学術講演梗概集』建築史・意匠、pp.349-350、2017年8月
YU Siqu, FUJIKAWA Masaki “The spatial composition of Wutai Mountain in the Late Qing Dynasty(1840-1912AD)” International Conference on East Asian Architectural Culture, 1-3B-2, Tianjan University, China, 2017年10月
藤川昌樹「インフラとしての高質な景観・デザイン」まちづくりシンポジウム2017「景観とデザインのまちづくり」、石岡市民会館、2017年11月25日
藤川昌樹「まちの魅力を発見し創出するー地域資源を活用したまちづくり事例を通じてー」、まちづくりシンポジウム「魅力あるまちづくりを創出し発信する」、東北工業大学一番町ロビー、2017年12月5日

〔図書〕(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

<http://wright.sk.tsukuba.ac.jp/fujikawa/index.html>

6. 研究組織

(1)研究代表者

藤川昌樹 (FUJIKAWA MASAKI)
筑波大学・システム情報系・教授
研究者番号：90228974

(2)研究分担者

なし